

このパンデミックの間、本会の姉妹たちもまた監禁生活を過ごしており、奉仕と連帯の精神でこの新しい現実に適応しようとしています。この新しい毎日がどんなものであるのかを何人かの人々に尋ねました。

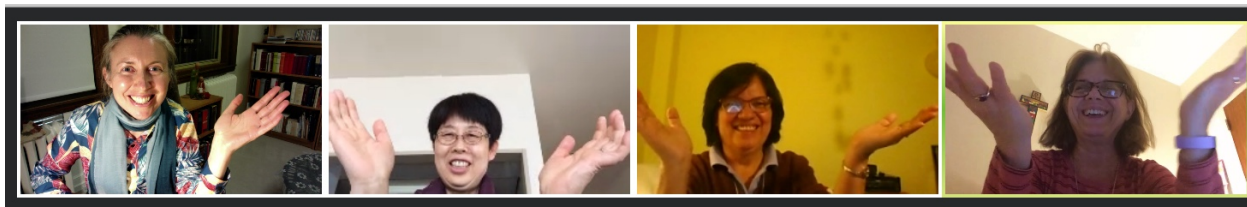


この監禁生活は、いくつかの理由から私にとって特にきついものとなっています。私たちが現在経験しているこの日常生活の中断は、神と他者に近くあるという極めて重要なことに私を呼び戻してくれます。現在の私の仕事のほとんどは、オンラインで教えること、Skype®や電話による同伴、生きている炎を再び燃やすために行っている聖書の解説書の執筆など、様々な通信手段によって遂行されています。私が住んでいる母院は、普段様々な場所から来る人々が出会う場所ですが、今は一握り（13人の姉妹たち）で家事のかなりの部分を分担しています。

刻々と変化して行く適応は、私たちの間に壁を超えた相互の連帯という深い喜びをもたらしてくれます。コロナウイルスの危機が世界中で多くの社会的、経済的、政治的苦難を引き起こしていることを理解している一方で、私はそれが、国境を越え、違いを超えて私たちの距離を縮めることにどのように貢献できるのかを理解してもいます。この共通の脆弱性は、私たちがつながり合うことの助けとなっているのです。先日、エルシリア（こちらに住んでおり、母

親を亡くしたばかりのシスター）を支え、彼女の家族に寄り添うために、ホンジュラスで行われた葬儀にZoom®で参加しました。

コロナウイルスとの闘いの中での経験を分かち合い、アクティブに思いやりを示す目的から、私は定期的にヨーコ（福島在住の日本人）、メルバ（ニューヨーク在住のホンジュラス人）、マコ（ニューヨーク在住のイタリア系カナダ人）という異なる国から来た3人の姉妹とビデオ会議を行っています。ビデオを通して、私たちはお互いに手を差し伸べています。何年か前に私と同居していた若い女性であるクリスタ・ジョイさんは、Zoom®を介して「希望のバーチャル・フェスティバル」を開催しています。この集まりに参加できることを嬉しく思うと同時に、その創造性に驚かされます。個人個人の努力と共に「力を合わせるとき強くなる！」ということを実感しています。



マリー・ド・ロヴァンフォッス CND

## マリア管区では...

明治学園高校は、3月2日卒業式を行いました。新型コロナウイルスの感染を防ぐために、式の中でも参加者はマスクをつけました。

普通は、1時間半くらいかかるセレモニーが30分に短縮されました。

このあと学校は、臨時休校となり、今も続いています。

私たちは、web 授業を始めました。ふだんなら、子どもたちの遊ぶ声が聞こえるのに、今は「沈黙の春」です。



伊達幸子 CND

## トロント Presentation Manor Residenceでの生活

3月13日から監禁状態に入りました。家族も友人も入れない状態から徐々に始まり、制限が増えて行きました。

敷地内を歩くことができるため、毎日行うように奨励されています。外出は一切ありません。いずれにしても、全てが閉ざされています。

食料品の買い出しに出かける必要はありません。皆さんや、多くの人々も同じであることと思います。食事は各自の部屋でとらなければなりません。

私たちが望むことはありませんが、皆の安全を守るために受け入れています。

ここでは、すべてがうまく行っています。

友人や家族とつながり合っている方法として、電話やメール、ズームがあることに感謝しています。

マリー・アッサレロ CND

## プリンスエドワード州で新型コロナと共に生きる日々

何という一週間だったのでしょ...時計が一時間進み、満月、おまけに 13 日の金曜日でした。予言が示したような困難な週にならないことを祈っていました。判断は皆さんにお任せします...

3 月 13 日（金）、私たちは大学の学長から最初の週報として以下の情報を受け取りました：a) 私たちも知っているとおりにキャンパスライフが閉鎖されたこと、b) 授業や試験はオンラインへと移行すること。翌週の火曜日には（状況は刻々と変化しています）スポーツセンターと図書館が閉鎖していました。UPEI チャプレンシーセンターにはキャンパス内のフードバンクがあるため、センターは「必要不可欠なサービス」とされています。それ以来、キャンパスミニストリーとしての私の任務は、帰国できなかつたり、季節ごとの仕事を見つけられなかつたりした留学生の一時的なニーズに応えることへと変化して行きました。個人的な慈善の務めは、私の毎日の祈りとスケジュールの中で重要な動機づけの役割を果たしています。

キャンパスのコミュニティーや周辺地域の人々は、寛大にも金銭や食料の寄付をしてくれました。私たちのフードバンクは、いつもコミュニティーに支えられてきましたが、この危機は食料や資金、信仰さえないような人々へのより深いコミットメントを皆に呼びかけました。「シスター、何か必要なものはありますか？シスター、お手伝いしましょうか？」ニーズは大きい、でも対応も良好です。

ネットでお店の広告をフォローしています。いくつかの食品や家庭用品の購入には制限があることを踏まえ、大量の買い物には、通常店長との会話を要します。スプレッドシートでの財務はかなり得意な方でしたが、こここのところ、そのスキルは計り知れないほど向上しています。この状況がどれくらい続くのか、私たちにはわかりません。

では、どうしたら元気でいられるのでしょうか？コミュニティーやキャンパスライフ、友人や家族の生活、ジムでのクラスなど、私は多くの事を犠牲にしてきたと感じています。私の祈りもまた変化し、それが単に一日の中で人々のためにやらなければならないタスクとにならないように努力しています。ですから、歩くことにしました。急にひらめいたのです。ここ数年、私と FitBit との関係は不規則で、時に忠実な時もあれば、そうでないときもありました。ルーティーンを見つけるのに一週間ほどかかりましたが、それ以来、歩くことは私の下地になっています。生活が定期的に変化し、混沌としている今、一万歩のために一時間（今はそれよりもう少し多く）を作り出すようにしています。

孤独感、そして距離をとることが課題です。そこで、歩きながら短い動画を撮るようになりました。まるで自分が行く先々で誰かと一緒に歩いているかのような感覚があります。インスタグラムでは、動画を 60 秒以内に収めなければなりません。Facebook や YouTube はもう少し寛大です。「信仰と共に歩む (A Walk by Faith)」 「60 秒以下の説教」は、現在私の YouTube チャンネルである「Susan Kidd CND」のプレイリストになりました。その日の朝に何を祈ったか、その日に何をしたかによって話題は変わります。散歩は遅い時間になりがちです。服装は、帽子・マフラー・手袋からパーカーまで、天候によって異なります！春の暖かい気温よ、早く来い！

私の散歩やトークが「公開」されるようになった今、みんなが見ていて、コメントをしてくれています。「シスター、見ましたよ」「シスター、すごいですね」「シスター、頑張ってる」ですから、ダイニングテーブルのオフィスで、またはソファの上で Netflix に一日の多くの時間を費やしてしまった時、一万歩への自己満足のために、そして見てくれている人々へのアウトリーチのために、私は歩きます。さあ、一緒に頑張ってください！

スーザン・キッド CND

## 新型コロナの日々を生きる

コロナウイルスのホットスポットで「屋内退避」しているこの時期、私たちは脆弱な者たちと共に脆弱な者となっています。年齢、任務、状況により、私たちはこの歓迎されない、生命を脅かすゲストと共に生きていることを認識せずに生活することは一時もありません。地理的な場所や年齢によって、支部修道院のすべての姉妹たちは、屋内退避を要求されています。三人の姉妹たちが思い浮かびます。一人は、見捨てられたティーンたちのための大規模な避難所の監督をしています。犠牲者であるこれらの若者たちの一過性の生活のため、スタッフたちは新型コロナの手順である隔離を、仕事場においても家でも行わなければなりません。もう一人の姉妹は、リスクの高い市内の病院の院内チャプレンです。この時点では、コロナ患者と直接接触することは許されていませんが、呼び出し待機中の彼女の任務は、スタッフたちが患者を死で失うことや、同僚の病気や死に対処することに密接に関わっています。職場や家庭での暴露の問題を考えると、場合によっては、この避難期間中に姉妹が支部修道院に戻れないことを意味することもあります。最後に、大きな教区にいるもう一人の姉妹は、高齢者である会員たちの司牧宣教者であり、これらの会員のうち 400 人が 80 歳代です。「避難」以前の彼女の仕事のほとんどは、自宅や病院を訪問することでした。この姉妹も、最近では事務所が閉鎖しているため、在宅ワークを行っている数多くの人々の中の一人です。彼女の任務は現在電話で行われており、電話での会話の一つ一つは、啓示という恵まれた時間となっています。まず彼女が電話を掛けたことに感謝され、その後だれかがウイルスでなくなったこと、検査で陽性になったこと、またはその他の危機を待ち受けていることなどを聞きます。最近では、病院や老人ホーム及び介護施設、福祉施設でも家族や他の訪問客との面会は禁止されています。

この世界的な規模での気づきの時、私たちに一体何が起きているのでしょうか？私たちは学んでいるのです。私たちは「高等種へと進化しようとしているのです。それは地球を大切にし、思いやりには行動が伴うことを知り、すべてがつながっていることの意味を理解しているのです。」<sup>i</sup>そして、マルグリット生誕 400 年目の今年、彼女は私たちと共に歩いてくださっています。



ジャクリン・ハンラハン CND

---

<sup>i</sup> 2020 年 4 月 26 日 「Bulletins from Immortality」 Jan Phillips.